

いもう 葦毛通信

平成26年12月8日
豊橋市文化財センター
TEL: 0532-56-6060

No. 16



ウメバチソウ

1、平成26年度中間報告—1

今年度の作業は、L地点から行っています。かつては良好な湿地でしたが森林化してしまいました。明るく良好な湿地が広がっていた頃には、コオニユリやササユリが見られたところですが、コオニユリは葦毛湿原では地上絶滅していますが、埋土種子から復活することを期待しています。平成24年度に行ったD・E地点の東側にあたり、木道から南側に木の伐採を進めています。

伐採しているのは主に常緑樹で、コナラやミドリシジミの食草になっているハンノキ等の落葉樹は残すようにしています。特に伐らずに残す木には黄色いテープでタグをつけて分かるようにしています。また、アケボノシュスラン、コクラン、カザグルマ等の自生範囲は、保護するため黄色いテープで囲んでタグをつけ、手をつけないようにしています。これらの保護区内部は細かな配慮が必要ですので、葦毛湿原調査員があとから個別に選択的な除草等の作業をしています。



L地点作業前 (10/28)



L地点作業後 (12/2)



アケボノシュスラン保護区域



アケボノシュスランのタグ

明るくなって日照が確保されれば、カザグルマやミカワバイケイソウが元気になって花を咲かせてくれることでしょう。

森林化していた時にはよくわかりませんが、伐採を進めるとD・E地点との間が低い尾根状になっており、尾根の東側は沢が流れて低く湿地状になっていることが分かり



マット状の被覆（除去前）



マット状の被覆（除去後）



アメリカレーキと自立式袋



立木のタグ(アズキナシ)

ました。水の流れがあるところにはあまり土が溜まっておらず、礫が目立っています。大雨のたびに上流から礫が流れてきているようで、新たに礫が堆積したり、また、流されたりして水の流れが変わっているようです。木道の脇も沢になっていますが、森林化していたところにも水の流れがあり、やや緩やかな斜面の低地を複数の流れが位置を変えながら流れているようです。



礫の間から現れた水の流れ

伐採した尾根状のところは、落ち葉や枝が堆積してマット状になっています。別地点での昨年までの観察の結果、これがあると植物の発芽が阻害されるようなので、できる限り除去するようにしています。アメリカレーキを使って掻き集め、ネットの袋や自立式の袋に入れて運んで、パッカー車で搬出して焼却します。

L地点中央付近の木道の西側に10×10mの範囲で植生調査のための観察区を設置しました。アケボノシュスランのあるところを取り込むようにして、仮に発掘用の鉄棒を差し込み白いテープを張って、周りの作業が進んで木を伐ってから、鉄棒の代わりにプラスチックの杭を打ち込みました。この範囲内で伐採前の樹種を記録してから伐採を行い、明るくなったことにより、今後どのような植物が発芽してくるのかを経過観察していきます。



L-1地点（10×10mの調査区：伐採前）

2、気づかない「視点」

葦毛湿原の大規模植生回復作業に関して、様々な視点と意見があります。大規模植生回復作業で大量に木を伐っていることに対して、葦毛湿原の現地で「このようなことを行ってもよいかどうかについては賛否両論ある。」と話をしている見学者もいらっしゃいました。また、昆虫の観察をされている方で、遷移に伴い色々な樹種が生えてきて、それに伴い生物の多様化が起こったのに、木を伐ってしまったら、そこにいた生物が犠牲になってしまうという意見の方もいました。

確かに、森林化したところの木を伐ってしまえば、伐った木に依存していた生物はその場からいなくなる可能性が高いと思います。今いる生物をそのまま残すのであれば、現状をこれ以上変化しないように管理して遷移を止めて固定するということになります。

しかし、葦毛湿原では、現状維持を目指して大規模植生回復作業を行っているのではありません。現在の状況は、遷移により森林化が進み、湿地、草地、疎林といった環境が無くなり、環境の多様性が失われたので、その多様性を回復しようとしているのです。現在の状況しか見ない人には、かつて良好な湿地だった時のことは見えず、その場から絶滅してしまった湿地性の生物がいたということは理解できません。つまり、歴史的な視点が無いと言えます。遷移とは変化であり、そのシステムを十分に理解するためには、**時系列を意識した歴史的な視点**が必要不可欠です。

葦毛湿原の大規模植生回復作業に関しては多くの視点があります。専門とする立場の違いから、植物、地質、動物、人間活動等、実に多種多様です。動物には、哺乳類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫等があり、さらに昆虫には、チョウ、トンボ、甲虫等、またさらに甲虫には、カミキリムシ、コガネムシ、カブトムシ、オサムシ等、細かく見れば数え切れないほどです。あらゆる視点を持って、すべてを総合して判断できる人間はいません。

自分が持っている視点以外に、多くの視点があるということに気づいて、他人の見解を受け入れて正しく理解しようとするかどうかは、その人の能力であるかもしれませんが、しかし、自然環境の保護を行っていく上で、必要不可欠な、きわめて重要な能力だと思います。この能力は、専門家や研究者といった特殊な人にしか持つことができないというのではなく、「**様々な視点があるということに、気づくこと**」ができれば、だれでも簡単に手に入れることができます。他人の視点を理解しようとし、**「自分のやり方」**だけに固執するのは簡単なことです。しかし、自分ひとりで物事のすべてを理解することは不可能です。

もし「自然というものの本当の姿」つまり、**自然の真実**が知りたいのなら、真実は自分の視点以外にあると考える謙虚な態度が必要です。

3、F地点播き出し実験中間報告ー1

F地点の播き出し実験に関しては、これまで3回ほど短報で紹介してきました。花の季節も終わりましたので、簡単にまとめておきたいと思います。紙面の都合で、詳細は次号になります。A・B・C区の植物について、葦毛通信13号でヌマガヤだとしていた植物は、カヤツリグサの仲間のようなようです。花が咲かなかったので種はまだ特定できていません。ヌマガヤはC区で1個体だけ確認でき、開花しました。A・B区はイグサの仲間が卓越しており、カヤツリグサの仲間がわずかに見られます。C区は他と明らかな違いが見られましたが、3か所全体を評価するためには、旧水田の上段と下段を含め、周りの環境との比較が必要だということが分かりました。次号で詳しくお知らせします。



F地点上段（播き出し実験区）



F地点下段

ヒメヒカゲの食痕？

植生回復作業で森林化していたところは木を伐って明るくなりました。その中でも水量が多いところでイグサの仲間が目立つようになり、動物の食痕が見られるようになりました。ヒメヒカゲ（県絶滅危惧ⅠA類・県指定希少野生動植物種）の食痕であれば、近くで越冬している可能性が高いという指摘があり、現地を調べてみましたが、確認できませんでした。

今年の夏あたりからあちこちで目立ってきましたが、食べている時に観察できていないので、動物が特定できません。冬になり確認が難しくなっているので、来年の3月以降に調査を行いたいと思います。もし、幼虫が食べているところを見かけたら、ぜひ写真に撮ってお知らせください。



ヒメヒカゲ？の食痕（イグサの仲間）